

令和七年度入学選抜 一般選抜 試験問題

試験科目 国語

【受験上の注意】

- 一 用紙は、すべて試験開始の合図があるまで開かないこと。
- 二 試験開始後、ただちに次のことについて、よく確かめること。
 - ア、乱丁、落丁のある場合は、試験開始後速やかに手を挙げ、監督者に知らせること。
 - イ、問題用紙は、全部で十一ページである。
 - ウ、解答用紙は、外国語学部が一枚、日本文化学部・教育福祉学部が三枚である。
- 日本文化学部・教育福祉学部の解答用紙に含まれている白紙は、メモ又は下書に利用してよい。この白紙は、持ち帰ること。
- 三 解答用紙の氏名欄・受験番号欄は必ず記入すること。
- 四 解答は、所定の欄内に楷書ではっきりと記入し、欄外には記入しないこと。
- 五 問題用紙の余白は、メモ又は下書に利用してよい。
- 六 問題用紙は、持ち帰ること。

外国語学部の受験者は一のみを解答すること。

日本文化学部・教育福祉学部の受験者はすべて解答すること。

試験開始	12:30
試験終了	外国語学部 13:30
	日本文化学部 教育福祉学部 14:00

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、文章は問題文とすにあたって、原文を一部改めたところがある。

一九八〇年一月号から翌八一年一二月号までの二年間、二十四回に亘って続いた安部公房のフォトエッセイの連載は、「都市を盗る」と題されているが、この言葉は、彼の写真撮影に対する態度をよく表している。

①「撮る」ではなく、「盗る」である。

もし、その対象が自然の一部であつたならば、「採る」でも良かったはずで、実際、そのスナップ写真には、昆虫採集的なコレクションの趣がある。森山大道の『光の狩人』のように、写真は常に、狩獵的なメタファを引き寄せてきたが、安部の意識にあつたのは、更に都市空間の政治性であり、その公的な存在の無許可の私物化という意味では、やはり「盗る」が相応しかったのだろう。

安部の写真を見てみると、それらが何故、撮られなければならないか、ハッキリとわかる。撮影時には、必ずしも動機を言語化できなかったとしても、彼が被写体に強い関心をそそられたことは、ありありと伝わってくる。『砂の女』では、昆虫採集家の心理が具に描かれたが、安部は都市の一部を切り取って、写真という形で手許に保有しておきたいと考えていたのだらう。

満州の奉天で育つた安部にとって、都市空間とは、徹底して人工的な、政治的に、人間が作ったものだった。そのシステムの中で暮らす人々は、システム自体の機能的な一部であり、人間は都市がなければ生存できないが、都市もまた人間がいなければ存立し得ない。この無機物と有機物との連続性を担保しているものこそが、国家への個人の存在の「登録」である。

安部が、この事実を骨身に染みて痛感したのは、戦後の引き揚げ体験からであり、後の作品でも、社会からの離脱による自由の獲得と公権力による保護の喪失という矛盾は、繰り返し描かれている。

私たちは、人間と都市とのこの聯関を、概念的に、俯瞰的に見る時、言わば「神の視点」に立ってこれに合理的に納得する。ところが、具体的に、微視的に、それも当事者ではない、近接する微妙な距離から同一平面上の他者として観察すると、一種の不

気味さ、滑稽さに見舞われることとなる。(中略)

安部の「匿名性」には、幾つかのレイヤーがある。一つには、ボーの『群衆の人』のように、都市部の人口密度が齎す匿名性であり、また人口流動による匿名性であり、また一つには、今し方の文中にある通り、汎用性の高い社会インフラに適合し、自らを「部品化」する匿名性である。他方、そうした都市から離脱し、公権力の「登録」から零れ落ちることで生きられる匿名性もある。

安部にとって、写真とは、人間がそうした匿名性へと呑み込まれ、また個人として出現する往復運動のボーダーを探る作業だったように見える。

彼はまったく、人間を真正面から顔と共に撮影することに興味がない。そのスナップは、基本的に「見る／見られる」という相互的な関係性を拒否しており、周囲が無人の環境か、^①窺視的か、彼自身が完全に匿名性に埋没しているかのいずれかである。

言うまでもなく、この時代のそのような「見る／見られる」という関係性の考察は、サルトルの影響抜きにはあり得ず、それは三島由紀夫の場合も、況んや大江健三郎の場合も同様だった。『存在と無』第三部の「対他存在」の考察で、サルトルは、「私から私自身へ指し向ける一つの仲介者」としての他者からの「眼差し」について語り、その不在の状況として、覗き見について論じているが、これは、三島が『豊饒の海』に至るまで執拗なまでに拘り、また安部が『箱男』で強調した主題だった。そして、彼が改めて都市の各部を検証したがつたのは、そのような他者の干渉を逃れた地点からだった。

安部が撮影した数々の風景は、都市空間の文脈に埋め込まれている限り、無意識化され、不可視化されている。撮影はまずその焦点化であり、フレーミングによる構造からの切断であり、同時に時間の「凍結」だが、しかしそれは、彼に言わせるならば、一種、擬似的な「凍結」である。何のためか？——思考するためである。

「凍結された瞬間は、まるで事実のように見える。だがどんな時間も本来凍結しえないものであり、凍結しえないからこそ時間なのだ。写真のなかの風景は、見えているような幻想をあたえるだけで、実際にはその近似値にすぎない。点が定義であって存在でないのと同じである。そこに記録された人物は、存在したかもしれない人物ではあっても、まだ確実に存在を保証されたわけではない。ひとはそこからまったく別の人物像をつむぎ出すことができる。その人物像は、想像力の延長であり、つまりは

自分の分身にすぎないのだ。無関係な二つの積分値がまじわる偶然の点にすぎないのだ。」(『都市を盗る』⑤)

これは、彼の手の中でカード状に集積された都市が、一点一点の慎重な思索を経て、一個の人間の姿へと具象化されてゆくその小説の構想を、さながら開陳したような件である。

撮影するとしな^{いか}いに拘らず、安部は常に、都市空間を断片化して収集し続けたが、しかし、小説家としての彼は、その擬似的な時間の「凍結」を解凍するために、それらを今度は、小説空間というリニアに流れる時間の中へと投げ返すのである。すると、そこで描かれる都市は、漠然と眺められた現実の直接的な写し絵ではなく、一旦切り取られ、各部が濃密に思考された後にパッチワーク状に繋ぎ合わされた全体として、奇妙に出現し直すのである。これが、安部文学の都市の風景であり、その情景描写だろう。

安部にとって、小説執筆とは、人間の顔を正面から見据えることであり、その内面を描き、個人を個人として輪郭づける作業だった。この時、写真撮影は、まさに言葉と対照的であり、^③相補的な作業で、両者はメビウスの輪のように繋がり、人間はその不安定な表裏の転換を、心細く辿り続ける。

『箱男』のテキストと写真との関係を、私たちはそのように感じ取っていたのではなかったか。

(平野啓一郎「メビウスの輪を歩く人間 写真と安部公房」『芸術新潮』二〇二四年三月より)

(注)

森山大道の『光の狩人』……写真家・森山大道の都市をテーマとした写真集『光の狩人 森山大道 1965—2003』。

『砂の女』……安部公房の小説。

奉天……中国東北部遼寧省の省都瀋陽の旧名。旧満州国の主要都市。

ポーの『群衆の人』……エドガー・アラン・ポー(アメリカの詩人・小説家)の短編小説。

今し方の文中……前段「(中略)」の箇所にあたる。人間の生理現象は、自らを「下水道」の「末端に連結させるための部品化」

であると同時に「匿名化」であるという趣旨の安部の文(「都市を盗る②」)を指す。

サルトル……フランスの実存主義の哲学者・文学者。

『豊饒の海』……三島由紀夫の最後の長編小説。

『箱男』……安部公房の小説。安部の撮影した八枚の写真が挿入されている。

リニア……線状。

問一 傍線部①㊦㊧の漢字をひらがなに改めよ。

問二 傍線部㊨「窃視」の同義語を文中から三字で抜き出せ。

問三 筆者は傍線部①の理由を「公的な存在の無許可の私物化」に見るが、他者との関係性から見た場合、どうなるか。二〇字以内で説明せよ。

問四 筆者の述べる「匿名性」と対になる意味を持つ言葉として使われている語を、文中から二字で抜き出せ。

問五 傍線部②とはどういうことか。「他者」と「自分」を用いて三〇字以内で説明せよ。

問六 傍線部③について、何と何がどのように「対照的」で「相補的」であるのか。一〇〇字以内でわかりやすく説明せよ。

二次の文章は『落窪物語』の一節で、女君(かつて落窪の姫君と呼ばれた女性)の父・大納言が亡くなり、喪に服す場面である。後の問いに答えよ。なお、文章は問題文とすにあたって、原文を一部改めたところがある。

大将殿は、若君たちに添ひたまひて、わが御殿におはす。日々に立ちながらおはしつゝ、泣きあはれがり、かつは後の御事、あるべきやうの御沙汰も、みづからも入りぬなむとしたまひけれど、父大殿、「あたらしき帝のたまひてほどなく、長々とあらむ暇ならむ、いとあしかるべし」と切にのたまふ。女君も、「幼き人々、ここに迎へむは、物忌などするにゆゆし^xかし。籠めおきたらむに、殿さへおはせずは、いとうしろめたなし。」^①な籠りたまひそ」と聞こえたまひければ、わが御殿に、ならはぬ独り住みにて、君達うち眺め遊ばして、さうざうしく思^Aさる。かくとくうせたまひぬるを見たまふにつけて、よくぞ思ふことをいそぎしてけると思す。

かの殿には、御忌なき日とて、三日といふに、をさめたてまつりたまふ。大将殿の御送りに、四位五位いと多く歩みつづきたり。^B「げにのたまひしやうに、死のさいはひ限りなし」と言ふ。

御忌のほどは、誰も誰も、君達、例ならぬ屋の短きに移りたまひて、寝殿には大徳たちいと多く籠れり。大将殿おはせぬ日なし。立ちながら対面したまひつゝ、すべきやうなど聞^②こえたまふ。女君の御服のいと濃きに、精進のけに少し青^③みたまへるが、あはれに見えたまへば、男君うち泣きて、

涙川わが涙さへ落ち添ひて君が袂ぞふちと見えける

とのたまへば、女、

^④袖朽す涙の川の深ければふちの衣といふにぞありける

など聞こえたまひつゝ、往^ゆき復^{かへ}りありきたまふほどに、三十日の御忌はてぬれば、「今はかしこにわたりたまひね。子ども恋ひきこゆ」とのたまへば、「今いくばくにもあらず。御四十九日はててわたらむ」とのたまへば、ここになむ夜はおはしける。

はかなくて、御四十九日になりぬ。この殿にてなむしける。「こたみこそはてのことなれば」とて、大将殿い^cとかめしうおき

てたまひけり。子ども、我も我もと、ほどほど^Dに従ひてしたまひければ、いと猛にきらきらしき法事になむありける。

（『落窪物語』より）

（注）

大将殿……女君の夫。女君とのあいだに多くの子どもがいる。

父大殿……大将殿の父・右大臣。

うしろめたなし……「うしろめたし」に同じ。

御忌なき日……葬式に差しさわりのない日。この日に大納言を埋葬した。

大徳たち……高德の僧たち。

御服……喪服。

三十日の御忌……葬送から三十日までの物忌みの期間。

御四十九日……初七日に始まって七日を一期として行う法要の最後の日。

問一 傍線部 A、B、C、D の意味を記せ。

問二 傍線部 X、Y を例にならつて文法的に説明せよ。

例 ナリ活用形容動詞「静かなり」連用形＋過去の助動詞「けり」已然形＋接続助詞「ば」

マ行下二段活用動詞「求む」連用形＋謙讓の補助動詞「たてまつる」終止形

問三 傍線部①について、女君は誰に、どのような理由でこのように言うのか。傍線部①の意味を明らかにした上で、説明せよ。

問四 傍線部②、③の主語は誰か。本文中より抜き出して答えよ。

問五 傍線部④は、喪服を「藤（ふぢ）の衣」と呼ぶことを踏まえた歌である。掛詞に注意して、現代語訳せよ。

三 次の文章は、孟子が諸侯に従うべきか否かを門人と議論している際に、故事を引いて門人に返答したものである。この文章は、狩りをする時には馬車に乗る御者と射者の両者が守るべき作法のあることを前提としている。それをふまえて読み、後の問いに答えよ。なお、文章は問題文とするにあたって、原文を一部改めたほか、返り点・送り仮名を省いた部分がある。

昔者、趙簡子使王良与嬖奚乘。終日而不獲一禽。嬖奚反命

曰、「天下之賤工也」。或以告王良。良曰、「請復之」。強而後可。

一朝而獲十禽。嬖奚反命曰、「天下之良工也」。簡子曰、「我使掌

与女乘」。

謂王良。良不可曰、「吾為之範。我馳驅。終日不獲一。為之詭

遇。一朝而獲十。詩云、「不失其馳。舍矢如破」。我不貫与小

人乘。請辭」。

御者且羞与射者比。比而得禽獸。雖若丘陵。弗為也。如枉道

而從彼何也。

〔孟子より〕

(注)

趙簡子……春秋時代の晋の大夫。

王良……馬車を操る達人の名。

嬖へい奚……奚という名の寵臣。

反命……帰って報告する。

強而後可……簡子に無理に頼んでようやく許可が下りた。

使掌……(その人に)担当させよう(と思う)。

女……汝。

不可……了承しない。

範……作法通りにする。

詭遇……作法通りにせず、相手の意向に合わせる。

詩……『詩経』。

不失其馳舍矢如破……「あるべき姿としては」作法から外れなければうまくいく」という内容が歌われている。

貫……習慣とする。

比……正しくないやり方で親しむ。

問一 (1) 傍線部①に返り点をつけよ。

(2) 傍線部②をひらがなで書き下せ。なお現代仮名遣いを用いてもよい。

問二 嬖奚が二重傍線部「賤工」「良工」とそれぞれ言つた理由を説明せよ。

問三 傍線部③は誰を聞き手とする発話か。以下のア、イ、ウの中から一つ選び記号で答えよ。

ア 趙簡子 イ 王良 ウ 嬖奚 エ 或 オ 彼

問四 傍線部④は誰か。以下のア、イ、ウの中から一つ選び記号で答えよ。

ア 趙簡子 イ 王良 ウ 嬖奚 エ 或 オ 彼

問五 傍線部⑤で、その人物を「小人」と王良が評価した理由は何か。五十字以内で説明せよ。

問六 この故事を通して孟子はどのような主張をしているか、二十五字以内で説明せよ。